

「社会教育」読者交流会 生涯学習か・く・ろ・ん その後



2025年7月15日

若者文化研究所 西村美東士

自己紹介 「社会教育」2025年8月号掲載予定

東京都青年の家では、それまでの趣味を生かして、ディスコ大会や情報講座を開発した。当時の情報提供に関わる論文が評価され、社研に採用された。

社研では、高い専門性の先輩方、議論漬けの同僚、愛すべき現職受講者と交流し、講師との一対一の接遇からなまの刺激を得た。また、坂井さんとのバレーボールからスポーツの楽しさに目覚め、小学時代受けたいじめのトラウマを解消し、「体育会系の人にもいい人がいる」(笑)という認識転換ができた。

社研時代は、公民館長になって毎晩、フリースペースを実施するという夢を持っていたが、縁あって大学教員の道に進んだ。そこではある本から、「大学でも楽しい授業をやっていいのだ!？」という有難い認識転換を得て、社会教育の娯楽性や双方向性の楽しさを存分に発揮することができた。

今は、若者文化研究所を開設し、論文作成やワークショップの支援をしている。

関連リンク

今回のパワポ資料

<http://mito3.jp/kouryuukai20250715.pdf>

西村美東士『生涯学習か・く・ろ・ん』学文社、1991年4月

<http://mito3.jp/seika/0600.txt>

個人化と社会化のスパイラル

<http://mito3.jp/syohyou/mitoron/3030.html>

第3の支援

<http://mito3.jp/seisin36.html>

居場所における支援

<http://mito3.jp/38201.pdf>

自立して社会に参画する個人

<http://mito3.jp/201710syakyo>

あらためて「個の深み」を考える

西村美東士『生涯学習か・く・ろ・ん』学文社、1991年4月

<http://mito3.jp/seika/0600.txt>

共る。っ高、り教なり、
「いい、もな（えま
ば、てとばり」はしつ
らてななるば者予と、
なせるるすこ秀がこ
度とせえをち優側る
程のさ考配落績授す
像も映て心「成教助る。
理想の反つ（援あ
理実も入」の、うが
の現てちれらしりよ要
「度い立ほか得なる必
法程お歩こム獲」すぐ
議るに一ちラを者得注
討あ善う落ユ」秀獲を力
団、改も「キみ優を力
集での、り深績」と
小場法しら力の成みっ
「の授かかた個」深も
う実践教しだし「の）に
い実の。の定）の個」
で育育いう設るで「助
」教教し違がす上）援
法会等樂は側負の的援
方社高もと授自準て義
とるのでで教し基し主
理ま国けま（覚価と人
原始がだ育は自評果個
のにわた教」がた成「
育ど、え等れ人しなば
教なを考中ほ個定別え
学」果ははこの設個い
大習成と育ちそがたで
「学」のこ教落（側っ言
同こた等」に授か一
あ避り時代
可代時

不肩き
りがべ
あ育る
も教え
で会考
ズ社を
一、と
二はこ
の割る
民役す
国のス
が、育ビ
が教一
化等サ
育高に
教の々
等来人
中本い
化、」な
衆的た
大義き
の主あ
育人に
教個育
高等「教
高、等
、ば高
しらの
もな日
、る今
は、す
いと、
るだし
あ避り
可代時

「個の深み」を支援する講義技術 書くこと・・・「出席ペーパー」の意義と実際

学生の場合は、「書く」という行為をもっぱら「成績評価」にむすびつけてとらえている。原因は、小学校からのテストとレポートであろう。私は、可能な場合は、試験の時に使われる大学所定の「解答用紙」をあえて配布している。学生は、そこに自由に記述する。学生の「書く」ことへの認知構造を変革させたいからである。社会教育や研修などでの講義の場合は、氏名は無記入でもよいことにしているが、大学の授業では出欠のチェックにも使うため、必ず氏名を記入してもらっている。ただし、記述内容は成績評価には影響させないことを宣言している。個別化の方向性には点数をつけられないからである。この紙を「出席ペーパー」とよんでいる。

「出席ペーパー」には、講義を聴いている中で、関心をもったこと、感じたこと、関連して考えたこと、関連する情報の提供、それらの考察などを、口語体でもイラスト入りでもよいから自由に書くことになっている。しかし、「講義どころではない固有の課題」を抱えた者の中には、講義の内容にまったく関係のないことを紙面いっぱいを書く者もいる。これらの記事の中には、しばしばユニーク（個別的）でおもしろいものがある。また、白紙で提出してもかまわない。それも、私の講義への一つの率直な反応であろう。

自らのプライバシーを綿々と綴ることも認めている。何回目かの失恋の話程度のものもあるし、私が初めて聞くような惨憺たる家庭状況などの話もある。その場合は、皆の前ではもちろん、本人にもそれについてのコメントはしないことにしている。とくに後者のような場合、中途半端な励ましは、かえって無責任になるからである。（教授者側に、徹底的にそれを理解し、解決まで面倒を見る覚悟がある場合は別だが。）それよりも、教授者に対して書くこと自体が、ちょうどカウンセラーがカウンセラーに話をしている状態と似ており、自分の本当の問題に自ら気づき整理することになる効用を訴えたい。ちなみに、本当に悩んでいる人に「頑張って」などの安易な励ましの言葉を投げかけてはいけないことは、カウンセリングの常識である。

「出席ペーパー」が百数十人分になる授業もある。それでも次週の授業までに、私は必ずすべてを読んでおく。学生に、そう約束してある。読むことは、やってみるとわかるが、とても楽しい作業である。教授者自身の言動が他者から受容されていることを味わうことができる。次の授業では、他の学生にも興味を引きそうだと思う箇所を、コメントをつけてプリントや口頭で紹介する。その場合、名前は伏せる。同じ立場の他の学習者（ピア・グループ）が書いた記事の紹介は、学習者からは大変な好評である。その紹介によって学習者の興味を持続したまま、本時の講義内容にスムーズに移行できることもある。

その後の発展

個人化支援と社会化支援の一体化

M365 Copilotに「個人化支援と社会化支援の一体化を主張している人は」と聞くと・・・

個人化支援と社会化支援の一体化を主張している代表的な人物の一人は、**西村美東士（にしむら みとし）**氏です。

彼は青年教育やキャリア教育の分野で長年研究を続けており、以下のような主張を展開しています：

西村美東士の主張のポイント

個人化と社会化は対立するものではなく、相互補完的な関係にある。

個人化：個人としてより充実して生きるための能力の獲得過程。

社会化：社会の中でより充実して生きるための能力の獲得過程。

青年教育において、個人化傾向の強い若者に対して、社会との接点を持たせる支援が必要。

「親密圏 vs 世間」という構図を乗り越え、「社会開放型」への意識転換を促すことが重要。

教育の目的は「人格の完成」と「社会形成者の育成」であり、個人としての充実と社会人としての充実は一体的に進めるべき。

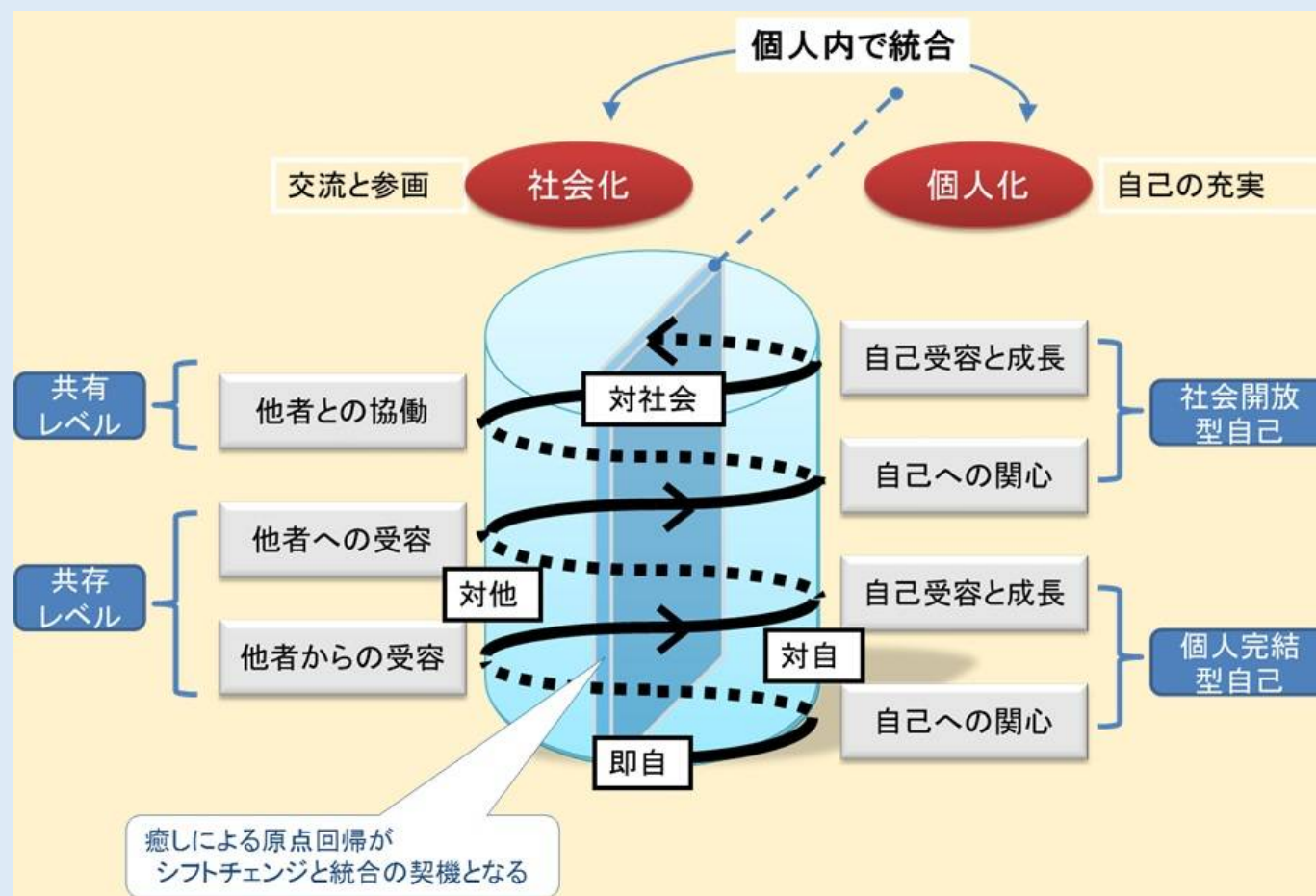
個人化支援と社会化支援をスパイラル的に理解することで、教育支援の連続性と動態性を確保できる。

このように、西村氏は「個人化支援と社会化支援の一体化」を理論的に整理し、教育実践においてもその融合を目指すべきだと主張しています。

個人化と社会化のスパイラル

<http://mito3.jp/syohyou/mitoron/3030.html>

「個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成—キャリア教育及び青年教育研究の視点から」、日本生涯教育学会年報33号、2012年11月



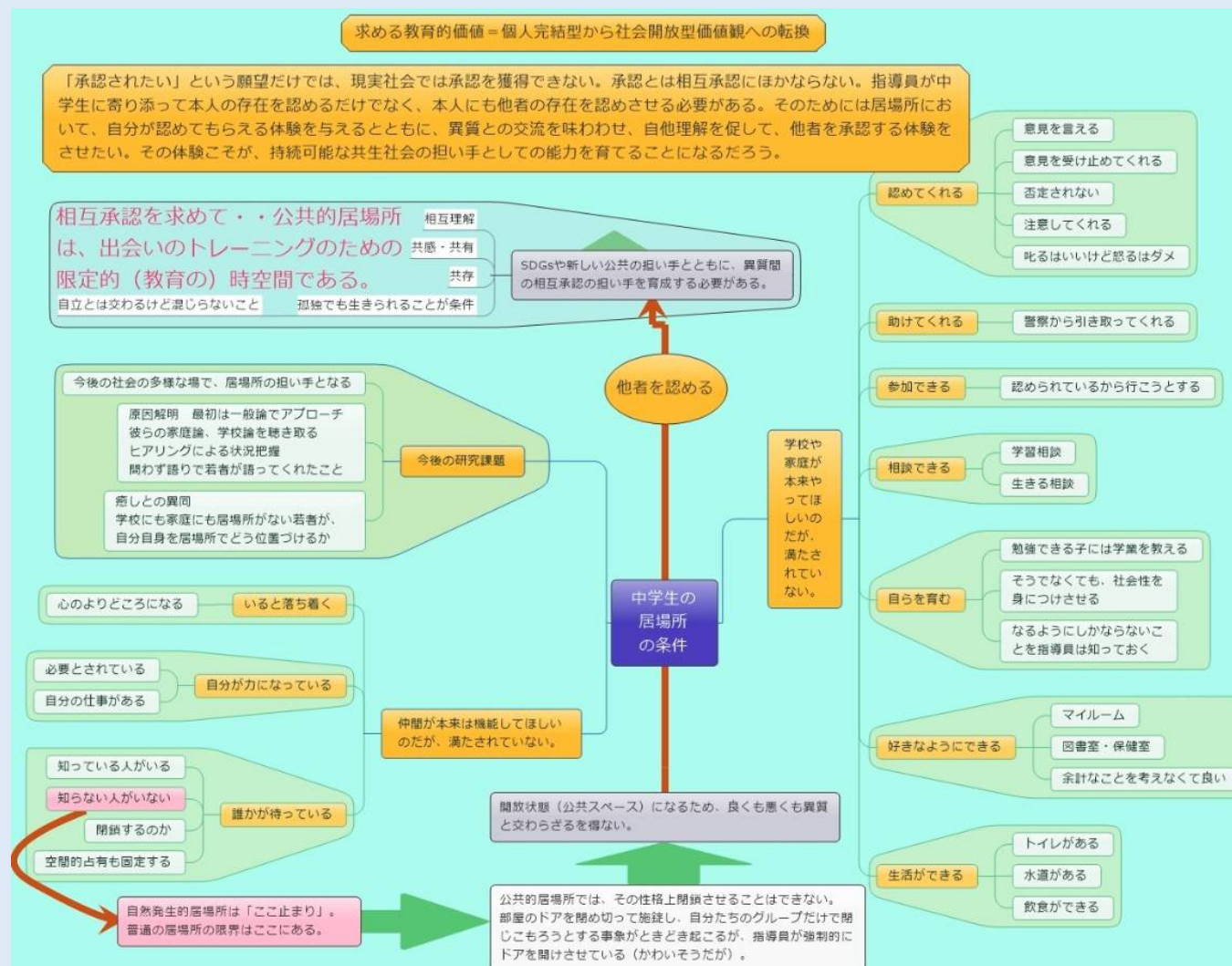
第3の支援

日本精神衛生学会 第36回大会 ポスター原稿
若者の居場所に求められる第3の支援

<http://mito3.jp/seisin36.html>



居場所における支援 日本子育て学会シンポ20180916



最終到達像 自立して社会に参画する個人

